

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25284004

研究課題名(和文)「組織の社会的責任」に関する哲学・倫理学的研究

研究課題名(英文)Philosophy and ethics of "social responsibility of organization"

研究代表者

水谷 雅彦 (Mizutan, Masahiko)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：50200001

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、これまで「企業の社会的責任」の文脈でのみ語られることの多かった社会的責任概念を組織一般のそれへと拡張し、現代社会において「組織」がもつ役割とその責任について、哲学・倫理的立場から総合的な検討を行った。社会的責任、アカウンタビリティ、ガバナンスなどの関連する諸概念の研究とともに、生命科学や研究公正といった分野における実践的な社会的責任のあり方について理解を深化させた。国内外の関連分野の専門家を招へいし毎年ワークショップや研究会を開催することで領域横断的な研究討議を行い、国際的な研究ネットワークの構築および拡張がなされた。

研究成果の概要(英文)：This project examined from the philosophical and ethical perspectives what roles and responsibilities "organization" in general have rather than only "corporate social responsibility" as before. Based on a conceptual analysis of social responsibility, accountability, governance, and other relevant concepts, we proposed a new understanding of social responsibility that is pertinent to such areas as life science, research integrity and other fields. Workshops and conferences were held every year with many researchers from Japan and other countries so as to promote a trans-disciplinary discussion on related matters and expand an international network among researchers.

研究分野：倫理学

キーワード：社会的責任 専門職倫理 ビジネス倫理 医療倫理 環境倫理

1. 研究開始当初の背景

持続可能な社会を実現するためには、さまざまな組織の社会的責任を果たすことが不可欠であるという考えは社会に広く共有されている。しかしながら、既存の哲学・倫理学では必ずしも対応できない下記のような問題が含まれていた。

(1) ビジネス倫理学における「企業の社会的責任論」は、主に私企業に限定された議論となっているが、行政組織や大学や学会を含む組織一般の社会的責任を論じるには不十分である。社会的責任という観点の下で集約して検討されるべき問題が、これまでは環境倫理、ビジネス倫理、研究倫理、生命倫理、科学技術社会論などの複数の領域に分断されてきたが、総合的な観点から検討する必要がある。

(2) 哲学における集団的責任論には蓄積があるものの、あくまで「集団」について論じるものであり、社会において一定の役割を担う「組織」の責任論としてみた場合、各集団の構造における各人の占める地位や職能や役割に応じた詳細な検討、およびこうした組織に必要な「社会的責任を十分に理解した人材」を社会がいかに供給するか、という視点が欠けている。

2. 研究の目的

(1) 現代社会において「組織」一般がもつ役割とその責任について、哲学・倫理学の立場から総合的な検討を行う。これにより、企業の社会的責任という文脈のみならず、社会的責任概念を組織一般のそれへと拡張する。

(2) 組織への主要な人材供給源である大学での専門教育における哲学・倫理学教育のあり方について国内外の実践を踏まえた考察を行う。

(3) 大学も社会的責任を問われる組織であるという認識に基づき、今後大学が果たして行くべき社会的責任について検討を行う。

以上を通じて、現代社会における組織の意義を明確化するとともに、大学の哲学・倫理教育が社会の人々のよき生に向けて果たしうべき役割を提言する。

3. 研究の方法

組織一般の社会的責任概念の内実を確立にするために、社会-組織-個人のあり方に関する主要な哲学・倫理学思想を吟味する。そのため、研究対象を(1)組織の社会的責任および関連する概念の哲学・倫理学的探求、(2)そうした探求の成果を大学での哲学・倫理学教育に導入する方法、(3)大学の社会的責任に関する検討に分類した。

(1)については、組織の社会的責任の議論と関わりが深いビジネス倫理および専門職倫理における先行研究の分析を出発とし、それらと関連して生命倫理や情報倫理の検討を行う。(2)については、倫理的に熟慮する能力

を持った人材を育成するためのクリティカル・シンキング教育の方法論などを概念的・実践的に探求する。(3)については、上記二つの研究を踏まえた上で総合的な視点から検討を行う。

4. 研究成果

(1) 組織の社会的責任概念を検討するために、関連するアカウンタビリティやガバナンスや自己責任論などの概念に関して、ビジネス倫理、環境倫理、生命倫理、研究倫理などの分野を中心に国内外の文献をサーベイし、各分野に通暁した専門家を研究会などに招聘、知識の共有と国際的なネットワーク構築を行なった。2回にわたるワークショップ「異議申し立ての書形式についての倫理学的研究」(京都女子大学、2013年9月21日、京都大学3月15日)、ルール大学の Jochen Vollmann 教授による講演(京都大学、2014年3月20日、2015年7月29日)、国立シンガポール大学で2014年2月19日に開催された「応用哲学ワークショップ」、100名以上の参加者を集め開催した国際会議「東アジア哲学会議」(京都大学、2014年8月28・29日)、Second Annual NUS-National Chenching University-Kyoto University Triangular Graduate Conference on Asian Philosophy (国立シンガポール大学、2015年3月6日-8日)、ブリストル大学の Richard Huxtable 教授や台湾国立大学病院の Cheng-Chung Fang 博士らを招聘した開催した「国際ワークショップ:終末期医療の倫理」(国際高等研究所、2016年4月22-23日)などである。こうした機会での研究討議を通じ、サーベイした成果を検討、口述する著作や論文として洗練させた内容を発表することができた。

(2) 社会の責任概念の検討の成果を大学での哲学・倫理学教育に導入するため、(1)の研究成果をもとに、大学の授業で利用できる教科書として、クリティカル・シンキングに関する『科学技術をよく考える』(出口康夫、伊勢田哲治、戸田山和久、村上祐子他、名古屋大学出版会、2013)を出版した。クリティカル・シンキングを扱った教科書は複数出版されているが、本書は科学哲学や科学技術社会論の観点を盛り込んだ点に類書にはない特色がある。この特色のゆえに、科学リテラシーの涵養や専門職倫理の教材として利用可能なものとなっている。

(3) 大学の社会的責任について本研究は、研究活動の倫理的問題に係る研究者個人の行動指針や組織としての対応を示すため、(1)の研究成果に基づき、研究公正についての『人文科学のための研究倫理ガイドブック』(眞嶋俊造、奥田太郎、河野哲也、神崎宣次他、慶應義塾大学出版会、2015)を出版した。研究分野によって手法や風土が異なるがゆえに、生命科学や工学を中心とした既存の研

究公正の議論だけではカバーしきれない、人文科学における研究公正を主題とすることで、これまで十分な倫理教育の方法が検討されていなかった当該分野での倫理教育に資するものとなった。

以上の成果を通じて、組織の社会的責任に関する総合的な理解の基礎を確立することができたと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 17 件)

伊吹知秀、児玉聡、親には最善の子どもを産む義務があるか--PGD を巡る一論争の批判的考察、生命倫理、23 巻、査読あり、2013、4-13

神崎宣次、憤り--一つの可能な倫理的態度としての、応用倫理-理論と実践の架橋-、7 巻、査読あり、2013、43-47

伊勢田哲治、技術者の自立と自律---専門職研究の観点から、電気学会研究会資料 教育フロンティア研究会 FIE14-025 " 044、査読なし、2014、21-26

出口康夫、ビッグデータは科学を変えたか?、現代思想、査読なし、2014、42(9)巻、80-85

Hiroaki ITAI, Akira INOUE, Satoshi KODAMA, Rethinking Nudge: Libertarian Paternalism and Classical Utilitarianism, The Tocqueville Review/ La Revue Tocqueville, vol. 37(1), 査読あり、2016、81-98

田中美穂、児玉聡、川崎協同病院事件判決・決定に関する解釈の論点整理、生命倫理、査読あり、vol.25、2016、107-114

Deguchi Yasuo, Tiental and Takahashi on the Three Satyas, 哲学研究, vol.600, 査読あり、2016、1-26.

他 10 件

[学会発表](計 55 件)

海田大輔、On the Invisibility on Mental Causation, National Taiwan University and Kyoto University Symposium 2013, 招待あり、2013 年 12 月 19 日、国立台湾大学(台湾、台北)

水谷雅彦、Information-sharing technology: EBM and its problems, Applied Philosophy Workshop, 2014 年 2 月 19 日、National University of Singapore (Singapore)

Mizutani, Masahiko, The Philosophy of Ignorance as the Starting Point of Applied Philosophy, Sweden-Kyoto University Symposium, 招待あり、2014 年 9 月 12 日、Uppsala University (Sweden, Uppsala)

神崎宣次、地域環境研究者の倫理：一般論と個別プロジェクトに基づく分析、第 61 回倫理創成研究会「アクションリサーチの実践と課題--哲学倫理学と地域」、招待あり、2015 年 3 月 20 日、神戸大学(兵庫県、神戸市)

Yasuo Deguchi, Suffering Substitution: A Mahayana Virtue Viewed from Contemporary Perspectives, The 1st East-West Philosophy Forum: Knowledge, Action and Virtue, 招待あり 015 年 6 月 25 日、Soochow University(Taiwan, Taipei)

水谷雅彦、社会と会話の倫理学、筑波大学哲学理想学会、招待あり、2015 年 10 月 10 日、筑波大学(茨城県、つくば市)

Satoshi Kodama, Miho Tanaka, Active and Passive Euthanasia in Japan: A Brief History, Medical Ethics in UK and Japan: An Exploratory Workshop, 招待あり、2015 年 7 月 23 日、Bristol University (UK, Bristol)

水谷雅彦、社会と会話の倫理学、筑波大学哲学理想学会、招待あり、2015 年 10 月 10 日、筑波大学(茨城県つくば市)

Satoshi Kodama, A Short Report of the End-of-life, Bristol-Kyoto Workshop on Ageing, Health & Ethics, 招待あり、2016 年 9 月 20 日、University of Bristol(UK, tol)

伊勢田哲治、社会における研究者の情報発信の役割 よりよい双方向コミュニケーションのために、第 50 回日本実験動物技術者協力総会、招待あり、2016 年 10 月 1 日、ウエスタ川越(埼玉県、川越市)

他 45 件

[図書](計 13 件)

出口康夫、伊勢田哲治、戸田山和久、村上祐子他、名古屋大学出版会、科学技術をよく考える、2013、306

伊勢田哲治、須藤靖、河出書房新社、科学を語るとはどういうことか 科学者、哲学者にモノ申す、2013、301

大滝雅之、宇野重規、加藤晋、児玉聡他、東京大学出版会、社会科学における善と正義、2015、370

JeLoo Liu, Douglas L. Barger, Deguchi Yasuo et al. Routledge, Conception of Nothingness in Asian Philosophy, 386

眞嶋俊造、奥田太郎、河野哲也、神崎宣次他、慶應義塾大学出版会、人文科学のための研究倫理ガイドブック、2015、257 (17-40)

直江清隆、盛永審一郎、伊勢田哲治、丸善、理系のための科学技術者倫理、2015、217 (22-23、36-37、138-139)

赤林朗、児玉聡他、勁草書房、入門医療倫理 III、2015、322 (11-24、115-119、265-285)

Koji Tanaka, Yasuo Deguchi, Graham Priest, Oxford University Press, The Moon Points Back, 2015, 285

他 5 件

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

科研費を使用した開催した国際研究集会

CAPE Workshop: Prof. G. Strawson & M. Montague on Philosophy of Mind, 2015年5月15日-2015年5月15日、京都大学

Kyoto-Soochow Joint Workshop on Virtue Epistemology East & West, 2015年6月3日、京都大学

第65回CAPEレクチャー Prof. Kevin T. Kelly, 2015年7月2日、京都大学

第66回CAPEレクチャー Prof. Bongrae Seok, 2015年7月8日-2015年7月9日、京都大学

第67回CAPEレクチャー Wendell Wallach, 2015年7月29日、京都大学

Prof. Jochen Vollmann Workshop, 2015年11月19日、京都大学

国際ワークショップ：終末期医療の倫理、2016年4月22日-2016年4月23日、国際高等研究所

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水谷 雅彦 (MIZUTANI, Masahiko)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号： 5 0 2 0 0 0 1

(2) 研究分担者

出口 康夫 (DEGUCHI, Yasuo)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号： 2 0 3 1 4 0 7 3

伊勢田 哲治 (ISEDA, Tetsuji)
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号： 8 0 3 2 4 3 6 7

児玉 聡 (KODAMA, Satoshi)
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号： 8 0 3 7 2 3 6 6

神崎 宣次 (KANZAKI, Nobutsugu)
南山大学・国際教養部・教授
研究者番号： 5 0 4 2 2 9 1 0

海田 大輔 (KAIDA, Daisuke)
京都大学・大学院文学研究科・講師
研究者番号： 4 0 6 4 9 1 3 3

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

()